

『悪食の猊』二〇〇八年刊

滝かけて隠岐の全霊澄みわたる  
かりがねや炎を空に刷くこだま  
首に巻きたしや隠岐なる天の川  
舟に立ち隠岐なる秋の天に立つ  
摩天崖穴に入る蛇かぎりなし  
怨霊も今日は青澄む隠岐の海  
巖の息海の息隠岐澄みわたる  
葦野火を包むかげろふ走りけり  
ひと跳ねの野火を捉へし濃陽炎  
天上もかげろふ走る野火ならむ  
初夢は太虚に海を吊り上げて

磯菜摘日かげるときを流人めく  
おぼろ夜を悪食の獏来たりけり  
世界中トースト飛び出す青葉風  
しばらくは塊とかず那智の滝  
また衣を脱ぎたる八岐大蛇かな  
彼の世にも天上あらむ芥子の花  
獏の頭に銀河のしぶき照りかかる  
万骨のオラシヨに月や亡き城に  
海に出て天にふくらむ吹雪かな  
百の耳立ててしぶきに凍つる巖  
流れつぐ水のほとりの聖樹かな  
ひなげしや驕慢の語気明るき子  
べた風や天に見ひらく師の目玉

ビッグバンからは日が経ち未草  
初夢につかみて声のやうなもの  
福寿草たどれば星座なすごとく  
知命なり氷を撥ねてくる日ざし  
亀鳴くは亀の幼霊あやすなり  
たましひとときどき笑ふ花の種  
なかよしの未知なる猯や朧の夜  
いかづちを躲し素戔鳴来たりけり  
かたつむり一心ならねば腐乱せむ  
ロボットは無季と蔑なみされとぐる巻く  
吾が輩は猫なり紙魚に食はれさう  
ロビンソン・クルーソー的や昼寝妻  
はるかより熒惑けいごく撥ねてマンタ来る

大金木犀なり舞殿へ雲なさむ  
師の句碑に捧げれば菊眠るごと  
ばらばらと星の音降る焚火かな  
吹かるるは水仙そして土星の環  
天狼や夙志に深き師のひかり  
身の闇を撈りて春の出でにけり  
春はあけぼの白鳥の子の目ひらく  
地母神も春や延命橋古りぬ  
春深き家をとぼとぼ出てゆく子  
大細胞なせり緑雨の城郭凶  
大笑面ならぼうたんのうしろなり  
鳥飛んで胴のぶれざる大暑かな